

病虫害発生予察注意報 第2号

病虫害名：イネいもち病

- 1 発生予想 イネいもち病が多発する恐れがある。
2 対象地域 県下全域（特に常習発生地、中山間地域）
3 根拠

- (1) 本年は常習発生地等において7月1半旬に葉いもちの発生が確認され、7月3半旬から病勢進展しているほ場が確認されている(表1)。
(2) AMeDAS(アメダス)データを用いた葉いもち感染予測モデルBLASTAM(表2)によると、7月1~20日までの感染好適条件の出現数は平年に比べて多かった。特に7月2半旬及び4半旬は広域かつ連続して感染好適条件が出現しているため、常習発生地及び中山間地域(※注)を中心に7月下旬に葉いもちが急激に病勢進展することが予想され(表3)、今後降雨が多い場合は葉いもちの上位葉への進展及び穂いもちへの感染・発病につながる可能性が高い。
(3) 7月24日気象庁発表の1ヶ月予報によると降水量が平年並となっているが、特に常習発生地及び中山間地域では局所的な降雨により病勢進展することが考えられる。
(※注) 中山間地域は、地形的に湿度が保たれやすく、いもち病が病勢進展しやすい。

〈葉いもち感染予測モデルBLASTAMについて〉

イネの最も重要な病害であるいもち病の発生を予測するため、AMeDAS(アメダス)データをもとに、温度、葉の濡れ時間等から感染に好適かどうかを判断するシステム。いもち病の感染には、気温と葉の濡れ時間の長さが関係する。感染好適条件とは10時間以上の濡れ時間と、濡れている間の平均気温が必要温度を満たし(15~25℃で濡れ時間により異なる)、かつ、前5日間の平均気温が20~25℃の場合である。

4 防除対策と留意点について

- (1) 水田の見回りを実施し、葉いもちの発生状況を確認する。
(2) 常習発生地及び中山間地域を中心に苗箱施薬剤未施用ほ場や多肥により葉色が濃いほ場では急速に病勢進展する傾向があるので注意が必要である。
(3) 葉いもちの発生が多いほ場では、液剤や粉剤を穂ばらみ期と出穂期に2回散布する。出穂期以降に曇雨天が続く場合には、さらに出穂5日後と10日後に追加散布を行う。中・晩生種で出穂期まで期間のある場合は粒剤でもよい。
(4) 防除薬剤は長野県農作物病虫害・雑草防除基準に基づいて選定する。降雨が続き、液剤が散布できない場合は、粉剤または粒剤を状況に応じ使い分け、適期防除を心がける。また、薬剤耐性菌の出現を防ぐため、同一系統の薬剤の連用は避ける。
(5) 多肥ほ場で、上位葉に病斑が見られる場合(特に抵抗性の弱い品種(コシヒカリ等))には防除を徹底する。
(6) 農薬散布にあたっては、周辺作物等への飛散防止に十分注意する。また、殺虫剤との混合剤を使用する場合にはミツバチに対する危被害防止に留意する。
(7) 発生には地域差がみられるため、今後の発生予察情報及び気象情報を注視し、適期防除に努める。

表1 常習発生地ほ場等における葉いもちの進展

調査地点	調査月日	調査株数	発病株率(%)	調査地点	調査月日	調査株数	発病株率(%)
上田市 八木沢	7月8日	1,200	0	飯山市 緑	7月4日	1,000	0.2
	7月17日	250	10.0		7月11日	1,000	1.4
小川村 夏和	7月11日	750	0.1		7月18日	1,000	31.8
	7月18日	500	3.0		7月23日	1,000	62.7

*上田市、飯山市は苗箱施薬剤(いもち病)未施用ほ場。

